

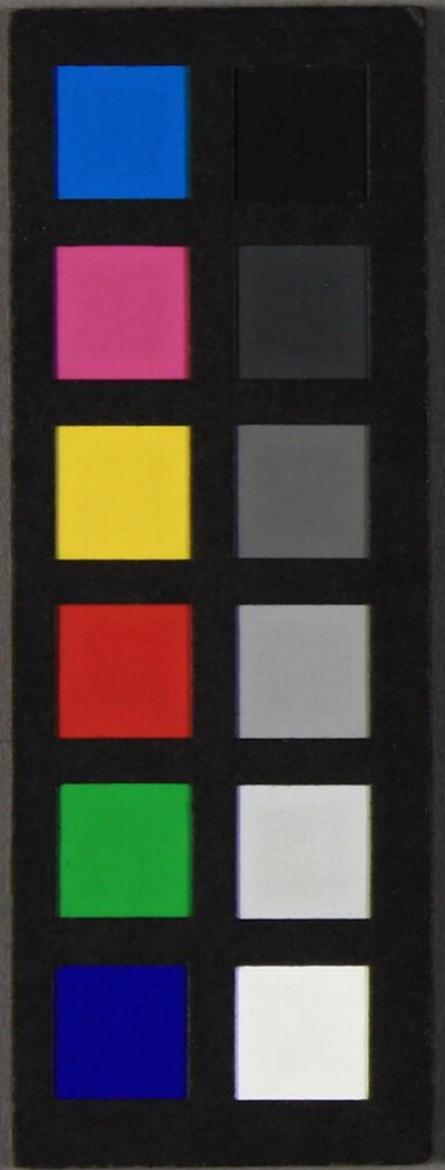
新 體 詩 歌

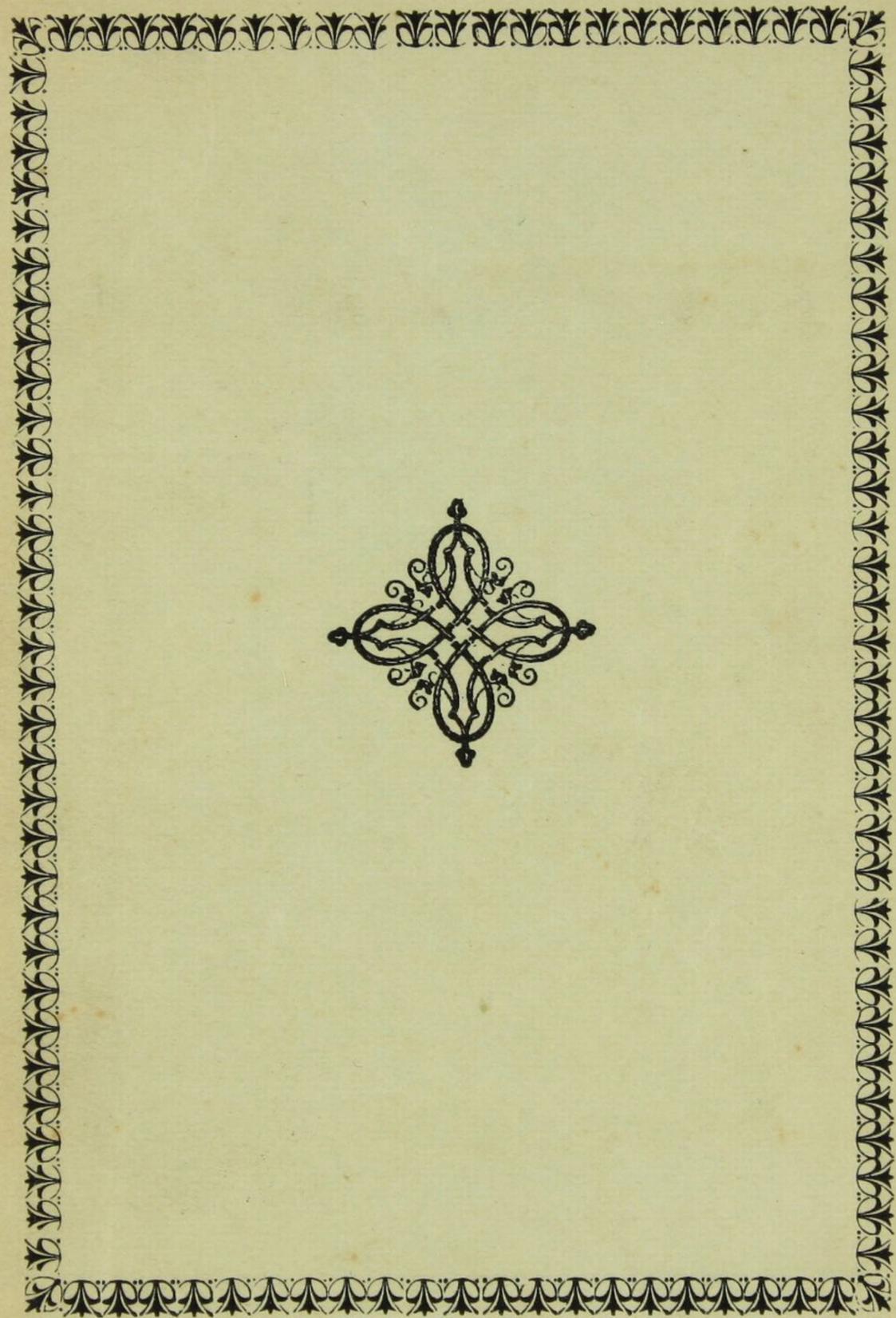
自 由 詞 林

植 木 枝 盛 著

明 治 二 十 年 十 月 出 版

自由の歌	自由の歌	自由の歌	不盧多斯	瑞西獨立	米國獨立
------	------	------	------	------	------





自由詞林

植木枝盛著

○米國獨立

易曰天地革而四時成。湯武革命。順乎天。應乎人。革之時至矣哉。昔者亞美理加洲之人民。攘英王之虐政。自興獨立一國聯邦爲之組織。共和爲之政體。立憲法撰大統領。乃使自由美人爲跳田于爾之新世界。豈也革之時之至者歟。允哉天下雖歷史之夥。未曾有快於米國獨立之史也。天下雖戰爭之多。未曾有義於米國獨立之戰也。予也自髫齡以還。讀美理堅之史已數回。而未知倦。自以爲只如此戰爭。

寔は自由之所以轟于天。震于地者也已。宜矣自由閣警鐘。擊之。擊之。及擊之破之。其聲囂々遙徹于九臯。則山川之撼搖于是。鬼神之泣哭于是。不可得言也。獨立之檄文。草之。書之。及飛之布告于宇内。則坤輿之響動于是。億兆之感起是者。不可得測也。先人有言。自由芽出獨乙深林。自由固芽出乎獨乙深林。而只其爲成長。則在不列嶺國。自由固成長于不列嶺國。而只其爲瀾綸四方。普及萬邦。則未有弗由北米美理堅之始爲打揭自由大旗幟于太平洋上之雲表。百億萬里之碧空之効也。然則以之爲天地一大變革。寧有何等不可。

茫々乎たり
太平洋は
基も固し
風も香し

茫乎たり
太平の
文明の
亞米利加洲

當時同盟
之を忍ぶに
頻に鳴らす
獨立閣の

十三洲
忍ばれず
革命の
鐘の聲

百年前は
國の支配の
民の自由を
其の暴虐も

英吉利の
いと辛く
蹂躪り
極まれり

獨立閣の
之をたゝいて
生くも死するも
自由よ自由と

その鐘も
たゝき破り
この時そ
叫びつゝ

四

老も若きも
少女が友も
其赤心を
先に〜と

差別なく
押なべて
振おこし
競ひたち

雲の如くに
襲ひ來れる
其の大軍も
進み戦ふ

四方より
英國の
物かはと
いさましき

樵る男も

海士が子も

天にとどろく

雷は

草刈る賤も

とり〜に

此處や彼處の

つゝの音

己が獲物を

提げつ

四方に閃く

電は

吾も〜と

雄健びて

交ふる戈の

その火花

五

きのふは親子
煙のなかに
けふは兄弟
雨ふる丸の

もろ共に
うち顛び
相俱に
下に伏し

血は漂ひて
ひろき海をも
屍は積みて
たかき山をも

波士頓の
朱に染め
落機の
築くべし

あはれ千古の
又絶世の
むなしく茲に
露と消しも

英雄や
佳人まで
戦場の
幾許ぞ

羶風腥雨
間に溢れ
七とせあまる
猛り戦ふ

天地の
あふれつゝ
憂き月日
其の結果

妖氛遂に

打晴て

目出度こゝに

英國の

支配を遁れ

獨立の

旗を雲井に

翻へし

凱歌の聲と

もろともに

始て開く

新天地

自由共和の

新天地

榮え行く世の

新天地

○瑞西獨立

瑞西之已爲奧國所併。而阿爾麥王所遣。欲士勒及珀倫揭之爲宰于此也。一以威壓爲先。力制爲主。疆禦莫不勉。培克莫不至。則民人之怒之。怨之。有幾不可言者。於是乎瑞的期、烏黎、翁德、瓦丁之諸州相合舉兵。欲一掃妖氛。維廉剔爾、亞爾那脫、米爾底撒等爲之魁首。剔爾元農家兒。生得有才力。善愛國憂世。寔爲希有人傑。至此與衆相議。立約束。編隊伍。期死以恢復自由。頻進兵。奮戰奮鬪。不知幾十回。精神之所至。上天之所祐。遂能以其小。破其大。始得開自主國云。抑亦快哉。

雲くもに聳そびゆる
其その風景ふうけいも
いまは春風はるかぜ
自由じゆうの花はなの

白山はくさんや
倫たぐひなく
和なごみつゝ
匂にはふなる
其そのむかし
併あだされて
暴政ほうせいの
ひまも無なし

左されば世よの爲ため
民たみの爲ため
天てん下の爲ために
革命かくめいの
師いくさをおもひ
起おこしにし
維廉うみれむてる別爾るの
こゝろざし

之これと心こころを
同おなじふし
ともともに慷かうがい慨がい
悲憤ひふんして
精神せいしん勃ほつ々く
やみがたし
米爾みるち底さる撒さる
別爾てるの親友しんいう

別爾てるに向むかひて
維廉うみれむてる別爾るよ
此この暴政ほうせいを
此この暴政ほうせいを

言いひけらく
我わが兄けいよ
いいかんする
いいかんする

此この一ひと言ことに
維廉うみれむてる別爾るも
いいといせせかかるゝ
思おもひして
其その用意よういをぞ
急いそぎぎける
はげまされ
今いまは早はやや
思おもひして
急いそぎぎける

干戈かんくわを執とりて
軍いくさを起おこし
其その裁判さいばんを
時ときいづれの

革命かくめいの
皇天くわうてんに
仰あはぐべき
時ときなるぞ

さて瑞西すういつの
彼かの苛酷いらけなき
嵐あらしの風かぜに
見みる目め忌ゆ々し敷しく
民たみぐさは
虐政ぎやくせいの
しをれふし
あればてつ

虎狼こらおほかみの
四方よもに蔓はびこり
踏ふみしだかるゝ
誰たれやし人ひとか

群むれなして
朝宵あさよひに
有様ありさまを
悲かなしまぬ

一千三百
歳としにあくるや
春はるは一月いちげつ
席むしろの旗手はたて

八年はちねんの
あら玉たまの
一日いちじつに
ひるがへし

怨うらみは深く
怒いかるこゝろは
寧むしろ死しすとも
此この暴政ぼうせいを

骨ほねに浸しみ
火ひの如ごとし
いかでかは
黙もだすべき

進すすめや進すすめ
自由じいうの戈ほこを
よもに蔓はびこり
虎狼こらおほかみを

國人くにびとよ
手た握にぎりて
あらび立たつ
つくせよと

我わが此この國くにに
汝なんぢが仇あだを
時ときは今いま此この
猛たけり戦たか

寇あだなせる
攘はらふべき
時ときぞとて
勇いさましき

彼かの白山はくさんの
天てんを覆おほひ
黒くろき煙けむりに
空そら吹ふく風かぜも

白雪はくせつも
雲くもを成なす
うづもれて
なまぐさし

打出うちだす音おとに
秋田あきたに集すだく
交まじふる戈ほこに
野分のわきになびく

散ちる玉たまは
蝨いんこまろ
咲さく花はなは
幡薄はたすしき

我軍勢わがぐんぜいは
今いまを限かぎりと
聲こゑは山やまをも
氣きは斗牛とぎうをも

猶なほも又また
はたらきて
轟とどろかし
貫つらぬけり

塙地利の

百萬の

其大軍も

いかでかは

敵することの

なるべきぞ

妖氛遂に

打ち晴れて

山なす屍

めで度も

築き興せり

自由郷

河なす血潮

めで度も

染め出しけり

自由郷

○不慮多

愷撒之已勝奔彪。身雖仍舊在執政官。威名赫々業已握羅馬全權。而更欲得國王之名也。頻務收攬人心。汲々不止。便佞之徒因而頌其德。無智之民隨而眩其利。天下相率將陷于虐主之權謀術策。國人不慮多者嘗以至親結愷撒之久。則其情之甚渥。亦如父子。如兄弟。而又不能代愛國之至誠。深視熟案。斷以愷撒爲共和國之賊。陰與同志相謀。誅之于議事院。以殉國家。何其義之至也。何其義之至也。及經一千五百祀。英國有舌克斯畢先生。作擬不慮多刺愷

撒演說文。曰不慮多之愛該撒也。猶該撒之愛不慮多耳。
 吾實非不愛該撒之極。而愛羅馬國。則有甚焉者。抑該撒
 之愛吾也。吾有感泣于此。該撒之隆運也。吾有歡喜于此。
 該撒之勇氣武也。吾有稱贊于此。吾將無激憤于咄奴之壞
 共和國制乎。故有感泣于該撒之友愛。有喜色于該撒之隆
 運。有稱贊于該撒之勇武。而欲無誅戮于其不義不得也。
 云々。其作亦可謂妙。噫夫圓頂方趾視息于兩間。而誰有
 不泣于一讀不慮多之傳者乎。

嗚呼義なる哉
 千古の義人
 萬世經ぬる
 其の名を遺す

猶ほも野心を
 己れ天子の
 窃まんものと
 姦計邪謀を

憶へばむかし
 執政官の
 彼奔彪に
 國の政事を

其の國人の
 之れと割なき
 限りもあらず
 汝愷撒

義なる哉
 不慮多
 後までも
 不慮多

羅馬にて
 愷撒か
 勝ちてより
 手に握り

挟み
 位をも
 さま／＼に
 運らすを

不慮多は
 友なれど
 憤り
 亡禮なり

共和の國を	ひるがへし
天下を己れ	一人の
物と爲さんず	其の心匠
實にや國家の	虐賊なり
ヨシ／＼ソウと	今は早
思案を定め	それよりは
同じ思ひの	人々と
密に事を	示し會ひ

羅馬の國の	民の爲め
斯の虐賊を	除かんと
用意を爲して	議事院に
彼の來るを	うかゞへり
暫ありて	不慮多か
虐賊汝と	叫はれる
聲もろともに	電の
光りあざむく	匕首

今入り來る	愷撒の
脇耦慙と	刺し透し
自由萬歳	羅馬國
人民勝利と	叫びたり
さて不慮多の	謂ひけらく
愷撒汝は	わが爲めに
親友なれば	われとても
いかで汝を	疎むべき

されどこの國	千萬の
民の自由を	愛するは
愷撒汝を	愛するに
猶百倍も	まさるなり
吁愷撒を	生かさん乎
民の自由を	いかにせん
民の自由を	護らん乎
愷撒汝を	いかにせん

愷撒汝が	是までに
予を愛する	仁心の
山より高く	海よりも
深きは予も	知るぞかし
汝が恩の	厚きには
涙のいかで	無かるべき
汝が其身の	榮えには
嬉しと誰か	思はざる

さても汝が	斯の國に
不義なる爲めに	予は又
汝に向ひ	謹んで
この刃をぞ	進めける
嗚呼義なる哉	義なる哉
千古の義人	不慮多
忠といふべし	不慮多
勇といふべし	不慮多

○自由歌(其一)

嗚呼自由てふ	賚は
天の興ふる	所なり
之を愛せよ	世の人よ
人を敬せよ	世の人よ
雲のうへなる	宮人も
草の廬に	住む賤も
斯の大なる	賚を
誰か受け得ぬ	者のある

自由は人の	命なり
自由は民の	寶なり
實にも人間	幸福の
その大王と	謂ひつべし
左れば斯の王	赫として
一たび怒る	其の時は
天地も爲めに	動くべく
鬼神も爲めに	懼るべし

蕩々乎たる	勢は
湛えし水の	一時に
堤を決り	行くごとく
山をもくづす	ばかりなり
其の精神の	溢れ来て
一度こゝに	激すれば
英に在ては	査列士の
首を刎ねたる	刀と爲り

佛に在ては	路易の
頭を斬りし	劍と爲り
米に在ては	英吉利の
羈軛を脱けし	檄と爲り
瑞に在ては	奥國の
支配を辭せし	其の軍
流るゝ血潮	積む屍
共和の國を	開きけり

電光一閃	不慮多の
思ひを遂げし	匕首
羅馬の民の	その敵
該撒茲に	誅せらる

馬克那查達と	なるときは
冑をぬきて	約翰王
民權黨の	轅門に
降伏をこそ	したりけれ

激雷一發	虛無黨の
爆烈彈の	轟くや
露西亞の國の	其の天子
亞歷山帝	頭なし

権理法案と	なるときは
脆くももろし	惹迷王斯
王の冠を	剥ぎとられ
一朝位を	廢せらる

或は佛國
親とも云はん
民約篇と
肝膽寒し

革命の
慮騷の
なるときは
虐主共

斯の王こゝに
何をか愁へ
國の光を
開化の花を

存すれば
哀まん
かじやかし
咲かすべし

或は米國
第一流の
其の演説と
莊烈に泣く

革命家
顯理の
なるときは
鬼神まで

吁嗟我が東洋
昔よりして
彼の專制の
斷る間もなく

亞細亞には
不幸にも
惡風の
吹き荒び

蒼生は
いと憂ふべく
病にかゝり
長たる甲斐も

卑屈てふ
歎くべき
萬物の
あらばこそ

看よや印度は
彼の英吉利に
安南は已に
其の獨立を

曾てより
滅され
佛蘭西に
蹴たほされ

人の人たる
國の光も
唯黙々と
之を復する

さまもなく
消ぬるを
餘所に見て
念もなし

緬甸や呂宋
皆歐羅巴の
其地を掠られ
奴隸とこそは

爪哇までも
國々に
あはれにも
なりにける

猶清國や	危きことの	或は版圖を	復いかんとも
朝鮮も	限りなく	縮められ	爲しがたし
たゞひとり	血涙の	潜然と	ばかりなり
之を思へば	湧くが如くに	浮び來りて	袖をうるほす

○自由歌(其二)(利韻)

吾の願は	吾の願は	自由と與に	共に死せんと
自由なり	自由なり	偕に生き	ちかひけり。
捨てぬとも	自由なり	殺すとも	自由なり。
寧ろ命を	捨つべからぬは	寧ろ我が身を	殺し難きは

さればバトリク	天に誓ひて	自由を與へよ	死を授けよと
ヘンリーは	吾々に	否らずば	叫びけり。
自由を以て	自由なくんば	こは佛國の	議員の誓ひし
世に在らん	死せんのみ	議會にて	詞なり。

彼の古の

其の萬民を

自から虐主を

己れも遂に

プラタスは

救はんと

刺し殺し

亡びたり。

愛爾蘭の

其の國政を

義兵を擧げて

身も刑場の

エミットは

正さんと

一朝に

士と爲り。

ジョーンケードは

時の政治を

干戈を執りて

軍の爲めに

其國の

憤り

革命の

斃れたり。

英倫の

我が本國の

權利を張らん

犠牲とこそは

テイレルは

もろびどの

其の爲めに

爲りしなり。

又瑞西や

其の獨立の

羶風腥雨

山の如くに

亞米利加は

戦に

屍を

かさねたり。

嗚呼自由の

身をも殺さん

士ともならん

辭する心は

爲めならば

戦場の

一點も

あらぬなり。

○自由歌(其三)

我われを捕とらふる
 我われを捕とらへよ
 我われを殺ころさん
 我われを殺ころせよ
 者ものあらば
 咄とつなんぢ汝ぢ
 者ものあらば
 咄とつなんぢ汝ぢ

百ひやくまんぜい萬まん勢せいの
 來きたらば來きたれ
 群むれなす虎とらや
 來きたらば來きたれ
 大たいぐん軍ぐんも
 咄とつなんぢ汝ぢ
 狼おほかみも
 咄とつなんぢ汝ぢ

われは自由じゆうの
 馬ばぜん前ぜんに立たちて
 死ししぬ可べんば
 生いきぬ可べんば
 大おほぎみ君ぎみの
 動うごかぬぞ
 死しせんのみ
 生いきんのみ

或あるは殺ころされ
 或あるは又また
 いかなる憂うさにあふとても
 自由じゆうの君きみの
 笑わらつて之これを
 爲ためならば
 受うけんのみ

噫あゝわれ吾われ々の
 夙つとに自由じゆうの
 捧さしげ置おきけり
 自由じゆうの君きみの
 此こののむくろ
 大おほぎみ君ぎみに
 愛あいすべき
 其その犠ぎ牲せい

殺ころされぬとも
 何なに惜おしむべき
 殺ころされぬとも
 何なに惜おしむべき
 死ししぬとも
 此こののむくろ
 死ししぬとも
 此こののむくろ
 何なに惜おしむべき
 此こののむくろ

明治二十年十月七日出版御酒
同年同月卅日 出版

定價 金五錢

著者 高知縣士族 植木 枝盛

土佐國土佐郡小高坂櫻馬場六番地住

出版人 高知縣士族 市原 眞影

土佐國土佐郡本丁筋三十三番地住

土佐高知種崎町
澤本 駒吉
全高知境町
山中 專助

大阪備後町四丁目
吉岡 平助
全南久太郎町四丁目
武田 福藏

限百部之內
定第十八號

昭和十一年 月 日印刷
昭和十一年 月 日發行

明治文藝
稀書復製會

編輯印刷
發行者
東京市本郷區元町一ノ十三
石川巖

發行所
詩仙洞
東京市本郷區元町一ノ十三

振替東京三七〇二三番